

《特別インタビュー》

「鉄工所の日常を描きたかった」

漫画「とろける鉄工所」の作者
野村 宗弘さん



● 6年の溶接経験、ありのまま表現

本作通じ溶接志す読者に「驚き」

漫画「とろける鉄工所」の作者、野村宗弘さんは広島で6年間溶接に従事した経歴を持ち、実体験を反映した作品は溶接界でも話題となった。漫画誌「イブニング」（講談社）の連載は5年以上に及び、単行本は2013年6月、最終10巻が発行された。野村さんに連載開始以降の溶接との関わりや作品に込めたメッセージなどについて聞いた。



—あらためて全10巻に及んだ「とろける鉄工所」の連載を振り返って

「しんどい漫画だったが楽しかった」



© 野村宗弘／講談社

——具体的には

「4 頁で 1 話のこの話、最初は 4 頁でも結構色々描けるなと思っていた。ただ、進めるうちに溶接を含めた仕事の内容も深くなる。4 頁の中で読者の知らない溶接を描くため、どうしても説明が必要になる。説明のための頁を割り、話を入れ、オチをつけ、次号に引っ張って…となると 4 頁ではとにかく厳しい。特に面白いと思うネタを削る作業がしんどかった」

「例えば新人に溶接という仕事を理解してもらうには時間がかかる。溶接を見たことがない人に読んでもらうことを踏まえると、新人に教えるように丁寧に描いていたら漫画としての面白さは壊れる。感覚的に理解してもらえればいいと思う反面、溶接関係者にはどう映るのか不安な面もあった。そこで自ら体験したこと、溶接に携わる人だけ分かるネタでフォローするしかない。かつての勤務先であったことをありのまま描こうと考えた」

——連載の間、作品に対する読者、社会の反応は。また、ご自身の受け止め方は

「連載が始まった 2008 年、自民党の麻生太郎衆院議員が『イブニング』の読者と知った。作品を通じていち鉄工所のありのままを伝え、業界の待遇をもっと良いものにしてほしい、麻生さんならしてくれるのではないかと、気持ちが高まった。鉄工所の日常、普通にあるようなことを書き始めたことで、経営者クラスには嫌がられるのではないかと考えた。しかし、実際は意外にも『よく描いてくれた』といった感想が多かった。溶接のイメージに悪影響を及ぼすのではないかと不安も杞憂だった。本作を見て溶接を始めた人や訓練機関に入った人も結構いた。連載が終わりに近づくころには『終わらないでほしい』というありがたい言葉もいただいた。本作はものづくりの漫画。漫画の中に短い話がぐっと詰まっている。この作品に関しては、これ以上長くなると、ものづくりが本来位置付けられるべき一番いい場所から外れるのではないかと考え、最終的には 10 巻を区切りとした」



単行本は全 10 巻発行

——「とろける鉄工所」が溶接を志す動機になった

「それが驚いた。ただ、溶接はしんどいところを乗り越えたら面白い仕事。読者アンケートやファンレター、ブログ、ツイッターなどを通じ読者の熱い気持ちが伝わった。夫が、あるいは、祖父が鉄工所を経営する家族の声も多く届いた。年配の女性読者の中には『戦時中の工場を思い出す』といった感想もあり、どれもとてもうれしかった」

——取材や関係者との面会など連載以降、溶接との関わりは

「自ら携わった溶接は、当時在籍した工場のルールに則したものであり、誤った認識があるかもしれないと、用語などを調べる作業にはかなりの時間を要した。取材もいろいろな場所に出かけた。全国溶接技術競技会（日本溶接協会主催）では外観を見て感動する一方、選手をうらやましく思った。私の溶接の師匠は中卒のたたき上げで当時 40 代前半だった。仕事には厳しく、精密機械のように溶接は上手かった。師匠が競技会に出場していたら上位に入ったのではないかと、その偉大さを再認識する機会にもなった」

「技能五輪を取材したときは、溶接がもっと表舞台に出るべきだと強く感じた。子供が競技をテレビなどで見たら憧れる世界だと思う」

「水中溶接の取材も印象深い。水中でどうして溶接できるのか尋ねると、ベテランの一人は『やってみたらできた』という。驚いたのは溶接棒にビニールテープを巻いて使用すること。水中は視界が悪く、黄色のテープを重宝していた。『水中だから溶接に焼けないのがいい』という言葉が今も印象に残る。水中溶接だけで長期連載ができるのでは？と思えた取材だった」

——「とろける鉄工所」込めたメッセージは

「溶接が表舞台に出ることは少ない。しかし、溶接に携わり必死に生きている人はたくさんいる。ただでさえ偏見の目で見られたりすることもあるのに悪いイメージに捉えられることが嫌だった。そこでリングに立ったことのない人をリングに上げたら読み手はどう読むか。鉄工所の日常の一部、溶接に関わる人と家族を含めて本人達は普通に生きているだけ。職人の仕事はすごいと言われるが、本人にとっては普通。その普通が描きたかった。普通は悪いものではない。自分自身普通に経験してきたことを描くのが面白かった」

「これから鉄工所で働きたいと思う、若い世代に言いたかったことは、出会いが少ないから先にそれ探しとけ」

「鉄工所を辞めたいのに辞められないキャラクターがいる。本人はなぜ鉄工所で働くのかも分からない。親も妻も子供もいない。口癖は明日死んでもいい。優れた技術と優しさを持っているベテランの方からこういう話を聞かされると悲しくなってくる。鉄工所に入った後も希望を持ち続けてもいいのではないかと。私が上司に言われたのは『この仕事を続けるなら趣味も探せ』」

「溶接に従事していた頃、毎日 12 時過ぎまでなぜこんなにしんどい思いをしなければならないのかと悩んだこともあり、愚痴ばかり言っていた。漫画家になって分かった。最初の上司は急ぐのは当たり前で、満足のいくものをつくれと言っていた。ところが上司が変わると、少々はいいのでとにかく急げ、と言われるようになり嫌だった。でもそうではない。どんな業種でも多かれ少なかれこういうことはある」

「そこで、自分のやりたいことを、『仲間のためにも自分のためにも、鉄工所がつぶれないようにしてやる』と、変換して考えるようになった。そうやって自覚している方が楽しく生きていけると

考えた。そうすると、技術を上達したいという気持ちまで高まった。人はやりたいようにできていないと苦しい。やらされていると思っていたことも、全て自己責任だと変換できるように考えていくと、やりたいことに変わることもある。そう思えると本気で戦うこともできるし、そのために休むこともできるようになる。それができるようになったら溶接に限らずどんな環境に置かれても多分幸せに生きていける。この漫画では最終的にはそれが言いたかった」

●取材を終えて



「浪速博士の溶接がってん！」のコミック版を見る野村さん

野村さんと最初に会ったのは2008年3月。本人曰く「念願」の溶接競技会場だった。「しんどいけど仕事は面白い。例えばボクシングのようなもの。周りからみたら、やけどをしたりするので『よく続くね』と言われるが、やっている本人は面白くないと続かない。それがもろに出る仕事」との溶接への思い入れは今も色あせない。

「溶接のしんどさ、面白さを伝えたい」と連載が始まった「とろける鉄工所」は大きな反響を呼ぶ。

「個人的には一番いい時機と捉え終了した。終了を惜しむ声を聞くと本当に

申し訳ない気持ちにもなる。日常を描いた作品であり、『日常は死ぬまで続きますよ。』という最終回にした。本作のキャラクターを使って、いずれ作品ができたらしいという思いはずっと抱いている」

本「WE-COM」の読者である溶接管理技術者にメッセージを求めると「好き勝手に描いてごめんなさい。ただ、本作で鉄工所の仕事が面白いと感じた読者はきっと、ものづくりをいい方向に考えて良い仕事をしようと思ってくれる人だと思う」

最後に、WE-COMの連載企画「浪速博士の溶接がってん！」のコミック版をパソコン画面で一緒に見てもらった。溶滴移行など動画のシーンでは「実は私も本作で写真を使いたいと思っていた。写真が一番わかりやすい」。漫画で溶接を描いてきた経験に基づく貴重なコメントをいただき、今後の「浪速博士の溶接がってん！」コミック版への展開に大きな弾みとなる。